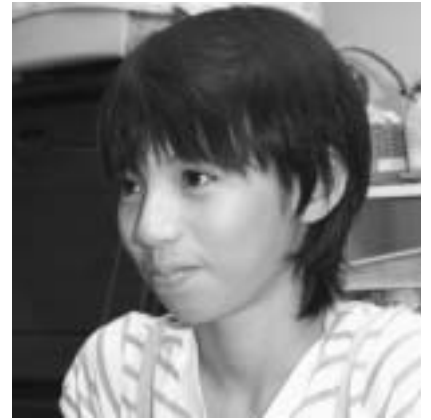


# 留萌子ども夢物語 ④



潮静小学校 5年  
市川 夏鈴さん

1. 「お誕生日おめでとう」  
この夏、十歳の誕生日もむかえた松に、母はこの本をプレゼントしてくれた。タイトルは「十歳のきみへ」だ。これは、医者でもある作者の先生が、十歳の松達に向けて、大切な事について語っている本だ。松は、これからの生き方のヒントになる言葉がたくさんつまっているように思えて、夢中で読んだ。初めに心が動いたのは、「他の人のために使えた時間が一番生きてく」という言葉だ。毎日、時間におわれ、自分の事をこなすだけで精いっぱいのは、他の人のために時間を使うなんて考えられない、と少し戸まごった。しかし、読み進めていくうちに、「自分のための以外に時間を使った時の最大の喜び」と、毎日の生活の中に気付ける事が出来たのだ。プラスタバンド少年団での日々のはたけの充実感や、コンクールで味わった素晴らしい感動も、自分の時間をみんなの時間に変えて欲しい。だからこそ、時間に命がけで、まじめ、意味のある

2. ものになら。たのだと思った。他の人と共有した時間は、一人の時間では味わえない。特別な喜びで心をいっばいに満たしてくれる。松はこれからも、家族のために手伝いの時間をさやしたり、友達にやさしくする時間を作ったりして、「松にできる他の人のための時間の使い方をも」と見付けて、「こう思った」。  
それから、「毎日の中に将来に生かせる」。「スンがかくれている」とも思った。何かに飛んだ。松が「かかかか」思った。かずにやんでいゝ事や、しかられてはかりでつらいなと思ふ事などは、大人にならため大切か練習の一つなんだと教えてもらった。今の松の苦しみは、「一つもまだな事ではなく必ず将来の松の役に立つんだと思つた」。そう思った。今の自分に買けるものか！と、新たなやる気と勇気がぐんぐんわいてきた。  
「ゆるすことのできる人になつて下さい」と先生が松達に託すこととしていた事だ。大人達がやられたらやり返すというくり返しをやめ

3. なかっただために、今も続いている競争。しかし、おたがいが相手の偉に気付き、相手をゆるす勇気をもては、和解への第一歩になる。いつ、松も時々の「やられてはかりてはいやだ！」「ちもやめてやるう！」と思ふ事があリ、そのたびに、「どんどんいやな自分になつていき、落ちこむ。子供のけんかも大人の競争も同じだ。やり返しかつて何を生まれない。松も先生と同じように思つた。せつ中にある十歳の子供みんなが、ゆるす気持ちをもつてあげれば、きっとその世界の平和の實現へつなげていけるのではないか。松もゆるす事が、ゆるす。相手の注意や意見でし、ゆるす前、一息おいてみよう。ゆるす事のできるやわらかい心をもて、これから一生懸命生きよう。それ、十歳の松にたくさんのおまをくれた先生へどけたい、松の返事で、行け！十歳の松！